

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02629

研究課題名(和文) R. ムージル研究 「批評」・「エッセイ」の特性と『特性のない男』の関係分析

研究課題名(英文) Comparative Analysis of Qualities of his Criticism and Essays with "The Man without Qualities"

研究代表者

長谷川 淳基 (HASEGAWA, Junki)

椋山女学園大学・人間関係学部・客員教授

研究者番号：40198718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代にムージルが新聞雑誌に書いた文を分析した結果、旧オーストリア＝ハンガリー帝国から分離独立した国々に対する彼の当初の期待が「特性のある批評」の形をとり、その後の時期に各国に根を張るナショナリズムへの彼の失望とこの状況を観察する彼の姿勢が「特性のないエッセイ」となることを確認した。

エッセイ「黒魔術」はこの彼の意識状況が分かるエッセイである。新たに発見したムージルのテキストについては、一部が新版ムージル全集 Robert Musil, Gesamt Ausgabe 10 に採られた。

研究成果の全体はドイツ語論文5本、日本語論文4本として公表し、すべてインターネットで閲覧できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オーストリアの作家ローベルト・ムージルの主著は小説『特性のない男』であるが、本研究は彼の「批評」、  
「エッセイ」について「特性」の有無を検討し、「特性のない男」の成立史研究に寄与することであった。この  
度の研究の結果、20年代初期から中期にかけてムージルの批評やエッセイからは「特性」が消失していく事実が  
確認でき、1930年に至って小説「特性のない男」が誕生するさまが、一連の経過として理解することができた。

研究を進める中で発見したムージルの新資料については、その一部がすでにオーストリアの出版社による新刊  
ムージル全集第10巻(Musil, Gesamt Ausgabe Bd. 10)に採られた。

研究成果の概要(英文)：As the result of my research in the 1920s journal-articles by Robert Musil, I have confirmed that while his "critics with qualities" reflect his earlier expectation for the nations newly independent of Austria-Hungary, his "essays without qualities" embody both of his consequent disappointment at the self-interested nationalism spread among the new nations and his indifferent attitude to observe these situations at a distance. His essay "Schwarze Magie" (Black Magic) is a good example, in which his consciousness those days is configured distinctly. Besides, I discovered his unknown texts in my research in Prague, part of which were already published in Robert Musil's Gesamt Ausgabe 10 by Austrian publisher Jung und Jung. My whole achievements in this research, five papers in German and four in Japanese, were published in academic journals; these are all available on the internet.

研究分野：ドイツ語・ドイツ文学

キーワード：ローベルト・ムージル ローベルト・ムージルの演劇批評 ローベルト・ムージルのエッセイ ローベ  
ルト・ムージルの新資料 ムージルへのアルフレート・ケルの手紙 プラハのローベルト・ムージル  
ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル Schwarze Magie

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ジャーナリストとしてのムージルに最初に注目した研究者はクルト・クロロップである。(1) K.クロロップは論文 Robert Musils Beiträge für Prager Blätter I, II (1962, 64)でムージルの批評の文学的意義を説いた。(2) マリー＝ルイーゼ・ロートは『ローベルト・ムージル - 演劇・批評と理論』(1965)を著し、その前半部分でムージルの演劇批評のテクストを網羅的に紹介し、後半に解説を付した。次の研究成果としては、(3) U.ティーベルの『外からの劇場』(1980)である。ティーベルはムージルの演劇批評家としての活動を1920年当時の演劇状況との関連で論じると共に、ムージルの2作の劇作品(『熱狂家たち』、『ヴィンツェンツ』)と『特性のない男』に言及し、ロートの研究を前進させた。この方面の研究は近年、より広い視野のもとで活発化している。研究成果として4点を挙げるができる。(4) N. シュトライトラー著『批評家としてのムージル』(2006年)。この著作は批評家ムージルの全体像を描く意図を持ち、目次設定は大変に興味深い各章の内容は目次に沿った概略の記述にとどまる。(5) H. ベルナウアー著『特性のない男』における新聞の読まれ方』(2007年)で、ベルナウアーは先ず小説『特性のない男』中の文章と同時代の新聞記事の照合を行なう。次に新聞に関するメタ批評(新聞が個人と社会の意識形成に働きかけるプロセスの考察)が小説中に挿入されている点などを分析し、『特性のない男』は新聞の扱い方に関して画期的小説であると結論付ける。(6) ペーター・ヘニングの論文「1914年8月のローベルト・ムージルの文学年代史における体験、創作ならびに批評」(2011)はムージルのエッセイと文学作品との有機的関連を指摘し、「ムージルの批評 文学年代史 (1914)では、彼の小説集『合一』(1911)での認識が新たな表象(「詩人はよそ者 fremdであり、変り者 Sonderling である」)を獲得しており、この表象に基づいてムージルはカフカら4人の作家の短編小説を理解・分析することに成功している」と主張する。(7) R. シャウニツヒの著書『陸軍大将に仕える詩人 第1次大戦でのローベルト・ムージルのプロパガンダ文書』(2014)はゾルダーテン・ツァイトゥング紙の軍人ムージルの記事すなわち「プロパガンダ文書」を分析し、それらの文章に後年の「特性のない男」の先駆けの姿を指摘している。

### 2. 研究の目的

作家ローベルト・ムージルは第一次大戦後の1921、22年そしてその後にかけて演劇批評家として生計を立てた。彼の演劇批評の特徴は、新生オーストリアないしは首都ウィーンの社会文化状況への批判と告発であった。ムージルの用語になぞらえるなら、この演劇批評を「特性のある演劇批評」と名付けうる。本研究は、(1)彼の演劇批評以外の批評(書評や展覧会レビューなど)並びにエッセイのすべてについて「特性」の有無を観察し、その結果をすでに分析を済ませている演劇批評に関する研究結果と合わせて総合的に検討し、(2)「特性」の観点で、彼の批評・エッセイ全般と小説『特性のない男』(1930)との関連性ないしは変化・展開の過程を明らかにする。

### 3. 研究の方法

先ず資料収集(ムージルの新テクストの発掘を含む)を行う。内訳は(1)ムージルの批評・エッセイの理解に必要な資料。ムージルが批評対象にした書籍、また展覧会などに関するカタログ等。他の批評家による記事。(2)これらに関する2次文献、研究文献(学位論文を含む)。また、研究資料のうちオリジナル資料にあたる必要がある場合にはウィーン国立図書館、プラハ国立図書館、ストラホフ修道院附属文学資料館、ベルリン国立図書館に協力を依頼し、必要に応じて直接訪問する。研究全般について国際ローベルト・ムージル協会と、特に専門的知識の提供とドイツ語論文の校閲について、また研究遂行に関するアドヴァイスについてカール・コリーノに依頼し、支援を受ける

### 4. 研究成果

1920年代にムージルが新聞雑誌に書いた記事・文章を分析した結果、旧オーストリア＝ハンガリー帝国から分離独立した国々に対する彼の当初の期待が「特性のある批評」の形をとり、その後の時期に各国それぞれに着実に、かつ自足的に根を下ろしていくナショナリズムへの彼の失望とこの状況を冷やかに観察する彼の姿勢が「特性のない批評・エッセイ」となることを確認した。2017年度より2021年度に及ぶ5年間の研究成果としてのこの結論の詳細は以下の通りである。

1920年代初期、特に1921・22年に最も頻りに発表されたムージルの演劇批評には、新生オーストリアと、同じく新生チェコスロヴァキアのナショナリズムに反対する彼の考え方ははっきりと確認でき、それ故にこれらの演劇批評は、彼の用語になぞらえて「特性のある批評」と名付けうる。「特性」とは、この後の1930年に出版されることになる彼の代表作『特性のない男』の「特性」のことであり、プロイセンの軍人タイプに見られる強い意志、あるいはワイマール共和国の外務大臣ワルター・ラーテナウが備えているような政治・社会・経済の諸事に精通し、課題に対応できる能力、優れた現実的能力を意味する。1921年頃のムージルの演劇批評には彼の政治的な意思が鮮明かつ直接的に表明されている。舞台上で演じられる作品あるいはこの芝居を見物する観客について、新生オーストリアのドイツ国民主義の表出をムージルが目当たり

したり、気づいたりしたときに、彼はこれについて厳しく非難し嘲笑する批評を書いた。ムージルのこの強く鮮明な調子すなわち「特性」が、そののち 1923 年以降に多く書かれる演劇批評以外の彼の批評・エッセイ・科学記事では喪失・消失していく。その端的な例が 1924 年頃にムージルがブラーガー・プレッセ紙に連載した Kulturchronik（「文化年代記」）である。この場合ムージルは自らの文章に「特性」を盛り込む必要のない科学分野というジャンルを自ら選択し、記事を書いたのであった。いわゆる理系出身のムージルにとって、科学記事の執筆については何ら特別の苦勞を要することはなかった。

そうした「特性のある批評」から「特性のないエッセイ」へと文章が変化する状況を一つのものとして同時に観察できる書き物が彼の散文作品「黒魔術」である。この「黒魔術 Schwarze Magie」は元は演劇批評として、すなわち 1923 年 3 月のカバレット劇団「青い鳥」のウィーン公演についてのムージルの観劇記として新聞に掲載され、この 2 カ月後になって改めて散文小作品に書き換えられブラハ、ウィーン、ベルリンの各新聞に発表された（なお、現在に至るまで存在を知られていなかったこの散文作品の別の原稿を、私はこの度ブラハの文書館で発見することができた）。「黒魔術」に関連する劇評と散文作品の二つの文章について注目すべき点は、後者の「黒魔術」が批評記事から文学作品に脱皮を遂げたこと、生まれ変わった姿を取っている点である。すなわち同じことがら・テーマを扱っているが前者の劇評「ロシア演芸」ではムージルの政治的な主張が勝ち、「黒魔術」では人間の普遍性を描いた文学的小作品と云うるものに形を変えている。「黒魔術」はさらに後年 1935 年になり、彼の小品作品集「生前の遺稿集」に収められることにもなるのもこうした経緯の結果である。批評には政治的な意図が目立ち、散文作品では作者の認識の深まりと巧みな文章化、すなわち文学性が際立つ。1923 年頃を境にしてムージルはジャーナル記事・文章においては「特性のない男」として、すなわち自身が抱く政治的見解や社会批判の直接的表明を控え、観察・省察を旨とする文章家へと変わっていく。そして、この歩みの先に、1930 年になり小説『特性のない男』が現れることとなる。以上がこの 5 年間の研究により到達した結論であるが、ペーター・ヘニングアーの研究について、言及しておかねばならない。ムージルの研究家ヘニングアーの名はすでに本研究を開始する以前から私の視野に入っており、上記の「研究開始当初の背景」においても氏の研究を紹介している。その後さらにヘニングアーの研究について詳しく調べる中で、彼がすでに論文「ローベルト・ムージルの創造の転換 1920 1930 または公式の発見」（1992）でジャーナリストとしてのムージルの文体と作家ムージル本来の思弁的な文体とが融合した結果として小説『特性のない男』が生まれたとの見解を述べていることを知った。ヘニングアーの論は小説『特性のない男』の成立はムージルのジャーナリストとしての体験、これに携わる中で身に着けた文体つまりは簡潔さあるいは軽みの特徴とする文体の獲得によって実現したと主張する。ムージルが書いた新聞雑誌向けの種々の記事のうち、特に Kulturchronik に注目している点なども含めて私の研究に大きな示唆を与えるものであった。しかしながらヘニングアーの研究は最初に結論があって、後からその理由付けをしていると言っている。ヘニングアーの説の概略はこうである。すなわち、小説『テルレス』、小説集『和合』、劇作品『夢想家たち』を一方のグループとし、小説集『3 人の女』、劇作品『ヴィンツェンツ』、短編集『生前の遺稿集』をもう一方のグループと見立て、前者はムージル本来の晦渋な思考世界から成る作品であり、ムージル自らが高く評価する作品であるが、世の中の反応・評判あるいは本の売れ行きなどは芳しくなかった。他方『3 人の女』の方のグループの作品は短時間で書かれており、そこでは深く思索を巡らされることはなく、ジャーナリストとしてのムージルの手になる作品であり、そのためにこれら 3 作は世間から好評を持って迎えられたとヘニングアーは述べる。その上でヘニングアーは二つの相異なるグループの「ハイブリッド（組み合わせ）」作品が小説『特性のない男』であり、この作品は世評を席卷することとなった、と結論付ける。ヘニングアーの論は大変に明快ではあるが、やはり論理的な破綻が目につく。例えば、小説集『3 人の女』は 1914 年から 1918 年の間の従軍中のムージルの体験に、あるいはこの小説集の中の作品「トンカ」は古く 1900 年頃からのムージルの特別な体験に由来して生まれた作品であり、ヘニングアーの主張は全く当たらない。また後者のグループに属する『ヴィンツェンツ』や『生前の遺稿集』が好評を得たとの記述も事実ではない。『ヴィンツェンツ』は書かれた後、早くに舞台に掛けられはしたが、ただそれだけである。人々はすぐにこの芝居作品を忘れ去った。『生前の遺稿集』でムージルがなにがしかのまとまった執筆料を受け取ったなどの事実はない。ヘニングアーは小説『特性のない男』がムージルの作家人生の最大かつ最後の作品であり、ここには彼の人生のすべてが反映していると見る。ムージルのジャーナリストとして経験もその一つであり、作家ムージルを語る場合には、このことについても相応に注目を払わなければならない、とヘニングアーは主張する。これについてはその通りであろう。現時点の最も優れたムージル研究家のひとりヴァルター・ファンタであり、氏は最新の「ムージル全集」の編纂者でもあるが、このヴァルター・ファンタも大著「ローベルト・ムージル『特性のない男』の成立史」の一節でヘニングアーのこの研究に言及している。しかし、ヘニングアーの論の理由付けには今述べたような破綻がある、というのが私の考えである。私の研究はヘニングアーの研究のうち、新聞雑誌に向けたムージルの書き物全般について、より詳細な観察を行い、「特性」の視点から特徴付けを行ったものである。そうした意味では私のこの度の研究は、以上述べたヘニングアーの論の不十分な点を修正・補足したとも言える。

なお新たに発見したムージルのテキストについては、一部が上記の新版ムージル全集 Robert Musil, Gesamt Ausgabe 10 に採られ、この巻の解説部分で私の名が挙げられている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Junki HASEGAWA	4. 巻 20
2. 論文標題 Ergaenzende Bemerkungen ueber die bis jetzt unbekanntenen Texte von Robert Musil	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studies in Human Relations	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junki HASEGAWA	4. 巻 19
2. 論文標題 Musil und Kerr in Prag, oder Der Brief Kerrs an Musil	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies in Human Relations	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junki HASEGAWA	4. 巻 19
2. 論文標題 Robert Musils kleine Prosa "Schwarze Magie" oder ein anderer Text "Kitsch und Kunst"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies in Human Reations	6. 最初と最後の頁 71-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川淳基	4. 巻 51
2. 論文標題 ローベルト・ムージルの新資料「レオナルド・ダ・ヴィンチの最初の彫刻」 - テキストと注解 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集、人文科学篇	6. 最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川淳基	4. 巻 18
2. 論文標題 ブラーガー・プレッセ紙の時代のローベルト・ムージル：小説『トンカ』へのノヴァーリスの影響について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学「人間関係学研究」	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junki HASEGAWA	4. 巻 50
2. 論文標題 Zu Robert Musils Theaterkritiken Ueber Tilla Durieux und Ida Roland	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集（人文科学篇）	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川淳基	4. 巻 17
2. 論文標題 Zu Robert Musils Theaterkritiken oder die Einfluesse Alfred Kerrs auf Musil	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間関係学研究（椋山女学園大学・人間関係学部）	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川淳基	4. 巻 第49号
2. 論文標題 ローベルト・ムージルの美術批評	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集 人文科学篇	6. 最初と最後の頁 129-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川淳基	4. 巻 第16号
2. 論文標題 ローベルト・ムージルの美術批評1921-1922	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 椋山女学園大学「人間学研究」	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------